第11回ベンチャー・カップCHIBA

千葉市産業振興財団主催

受賞盾と賞状を手にする受賞者

千葉から飛び立て、日本へ、世界へ―。千葉市産業振興財団（千葉市中央区、西牟田勲理事長、043・201・9501）は11月、千葉市内に事業所を置く企業の事業プランを表彰する「第11回ベンチャー・カップCHIBA」を開いた。「一般部門」では、５社が参加者約130人の前で、プランを発表。グランプリと準グランプリに各１件、優秀賞に３件が選ばれた。前回に続き「学生部門」のグランプリと、地域の課題解決に貢献するプランを対象とした「コミュニティビジネス（CB）部門」CB賞の表彰各１件を実施した。受賞プランを紹介する。

一般部門

グランプリ　A―CLIP研究所

難治性血管炎バイオマーカーANCA抗体のマルチ迅速測定キットの研究開発

代表社員
鈴木　和男氏

A―CLIP研究所は、難治性血管炎の早期診断キット「ANCA―Fast（アンカファスト）」を開発した。従来1日以上かかった血管炎の診断を15分に短縮し、開業医でも簡単に使える。血管炎の早期発見と重傷化防止に役立つ点や、海外展開も見据えたビジネスモデルが評価されグランプリに輝いた。

鈴木氏は30年間難治性血管炎や感染症の研究に携わり、千葉大学大学院医学研究院の特任教授を経て今年創業した。腎臓などの血管が炎症して臓器不全を起こす難治性血管炎は国内に患者が1万人おり、予備軍は100万人と言われる。重傷化すると人工透析が必要で死亡率も高いが、症状が出にくく専門病院でなければ発見が難しかった。

従来、血管炎は専用機器でマーカーを1種類ずつ検査しており、診断まで1日以上かかった。新開発のキットは4種類のマーカーを一度に測定し、すぐに血管炎の種類を特定できる。マーカーの一つには鈴木氏が千葉大学で発見した血管炎の重傷化に関わる「モエシン抗体」が含まれており、製品優位性を持っている。

サンプル出荷を始めており、来年度以降、大手病院や開業医への販売を本格化する。量産化でコストを下げ開業医にはキットを1万円台で提供する予定だ。血管炎研究での豊富な国内外の人脈とネットワークを生かし、欧米へ輸出準備も進める。

今後はインフルエンザウイルスの簡易測定キットや、血管炎治療に不可欠な人工免疫グロブリン医薬品の開発を進めていく。大手製薬会社との連携も目指す。

（千葉市中央区亥鼻1の8の15、043・221・0831）

血管炎の診断を短縮する早期診断キット

喜びの声

製品で社会に貢献

アンカファストは30年の研究成果を詰め込んだ製品。受賞は非常にうれしい。製品を普及させて血管炎の早期発見を実現し、患者の苦痛や医療経済の軽減を通じて社会に貢献したい。キットを世界標準にできるよう一層努力する。

準グランプリ　東京ベイ通信

スマートフォンを利用した団体行動（旅行）に適した『スマート旅友ポン』の開発・販売

代表取締役
安藤　久氏

東京ベイ通信が開発した「スマート旅友ポン」は、団体旅行などにおいて、引率者と旅行者の利便性と安全性を向上させる機能を持たせたスマートフォン（次世代携帯電話）。親機と子機のセットで、引率者が親機を、旅行者が子機を使う。親機の画面上で、子機を持つ一定距離内の旅行者の数や位置を把握したり、集合人数を確認したり、緊急時に一斉通報したりでき、安全な旅行に寄与する。

外部のネットワークを経ずに、近距離無線通信規格（ブルートゥース）を使って、端末同士で情報をやりとりする「アドホック通信」を採用。通信料がかからず、通信制限の多い海外でも使いやすくした。ブルートゥースが使用不可の場合は、携帯電話回線を用いる。

親機で即時に集合状況を確認できる

昨年、音声通訳機能を持つスマートフォン「スマート通訳ポン」のレンタルサービスを始めた。通訳以外にスマートフォンを旅行に活用できる方法を模索して調査を進めると、団体旅行で引率者は、点呼による旅行者数の把握に煩わしさを感じていた。また、これまでは緊急時に一元的に引率者が旅行者へ情報発信できるシステムが無かったことが判明。スマートフォンで引率者の負担を減らすというコンセプトで、「スマート旅友ポン」の開発に踏み切った。

2013年3月をめどに、旅行会社や教育機関向けにサービスを開始する。貸し出しは親機が1日当たり600円から、子機が同200円からの予定。手持ちのスマートフォンにダウンロードして使うアプリケーションサービスの開発も進めている。

（千葉市中央区新町17の16、043・243・2231）

喜びの声

まずは国内で普及

「スマート旅友ポン」は、サービス提供に向けての最終実験の段階。すぐにも市場投入が可能だ。団体旅行を扱っている旅行会社などに営業攻勢をかけ一刻も早く普及を図りたい。まずは国内で認められるサービスにし、将来は海外展開も視野に入れていく。

優秀賞　エムエスイー

常時も、非常時にも活躍する大容量蓄電能力を持った独立型太陽光発電照明セット

代表取締役
前野　静夫氏

エムエスイーは太陽光パネルと発光ダイオード（LED）照明、鉛蓄電池などを組み合わせた低価格の創エネ・省エネシステムを展開。東日本大震災以降、非常用電源が注目を集める中で業績を伸ばしている。

同社のシステムは太陽光パネルの直流電力を通常時も非常時もそのまま付属の直流LED照明に利用する。従来の単に蓄電し非常時のみに利用するのでは「もったいない」（前野静夫社長）。通常時は照明に利用しながら蓄電し、非常時には蓄電池から事務機や家電などの交流機器にも電力を供給する。実際に自社の事務所工場にシステムを導入した結果、1カ月の電気代実質ゼロに大きく貢献できたという。

システムは発電容量ごとに11タイプをラインナップし、小規模事務所から工場まで幅広いニーズに応える。無駄な部材を徹底的に省き、0・1キロワット当たり10万円の低価格で販売する。

（千葉市稲毛区長沼原町66の1、043・258・7711）

喜びの声

常に時代に先行

受賞は大変光栄。近い将来、電気エネルギーは『自産自消』する時代になると思う。現在は電気自動車を太陽光パネルの電力だけで急速充電する装置などを開発している。常に時代に先行し、技術力と販売力を強化していきたい。

優秀賞　アカリネ

コア・プロダクトによるMade with Japan世界展開

代表取締役社長
森宮　祐次氏

アカリネは、照明と音響を融合した電気製品を開発し、それをコア・プロダクトとして、日本の伝統技術を外観などのデザインに生かして製品展開している。たとえば、電球型無線スピーカー「アカリネランプ」は、電球を照らしながらスマートフォン（次世代携帯電話）などで再生した音楽データを、近距離無線通信規格（ブルートゥース）を経由して流す。電球の周りを覆う傘には京都の番傘などの伝統工芸品を用いた。

コア・プロダクトの販売は、同品に付随する知的財産の「独占的通常実施権」を、直接網を持つ法人に与えて展開。製造も外注する。アカリネはコア・プロダクトの開発に徹する。

コア・プロダクトは、生活インフラとなりつつあるスマートフォンなどの携帯端末によって「進化」した家電製品と位置づける。日本が強みを持つデザイン力重視のコア・プロダクトを開発し、日本の家電の生き残りを企図。工芸品の採用で日本の素材技術や地場産業の復興を見据える。

（千葉市中央区弁天3の8の19、050・3414・0595）

喜びの声

マイペースに開発

自分が出来ることを突き詰めて、マイペースに製品を作り続けて、ここまでこられた。キーワードはセンス、アイデア、熱意。若い人にも「自分が出来るモノづくり」ができるように背中を押していきたい。

優秀賞　チバマシナリー

帆船翼風力発電機の開発、製造、販売

代表取締役
小野寺　孝好氏

チバマシナリーは独自開発の帆船翼風力発電機「エコウィン」の製造と販売を手がける。風車翼にヨットのセールなどに使う帆布を採用。ヨットが向かい風でも前に進む原理を応用し、風向きに関係なく風力を取り込めるのが最大の特徴だ。

風向計で瞬間ごとの風をとらえ、連結した翼の自転を制御。帆布で効力や揚力を生み出して発電する。低風速では世界トップレベルの発電効率を持ち、風速1・5メートルのそよ風程度で回る。回転音や低周波は発生しない。プラスチックの翼などに比べ低コストで製造できる点も強み。出力0・5キロワット級までを発売し、現在3キロワット級を開発中だ。

蓄電システムと組み合わせ、海岸沿いでの利用や農業用地でのビニールハウス暖房、山や離島での発電など幅広い用途を見込む。発電以外に養殖場の攪拌や井戸の水くみなどにも応用できる。

（千葉県茂原市本納1794、0475・34・2290）

喜びの声

新興国や離島にも

現在大手企業と大型風力発電機の共同開発を進めており、受賞を機に開発を加速させたい。エコウィンはシンプルな構造で材料も手に入りやすく、世界中で製造できる。将来的には新興国や離島にもこの製品を普及させたい。

学生部門　グランプリ

家事代行サービス「家助（Kasuke）」

荒川　快生氏
横浜薬科大学

横浜薬科大学3年生の荒川快生氏は、家事代行サービス「家助（Kasuke）」を開発した。家政婦と依頼者をウェブ上でマッチングさせ、契約完了時の契約料（1000円程度を想定）で収益を上げるしくみ。

家政婦の時給は、勤務経験によって各自に決めてもらう。副業として家事を手伝ってもいいと考えている人を「ハウスパル」と定義してウェブ上で募集し、採用することで割安なサービスを可能にする。

家政婦の時給は従来、経験不問で家政婦紹介所が設定。時給の大半が紹介所に充てられるしくみで、一般家庭にとっては割高だった。

「全国の共働き世帯で家事の委託を希望する人は多いが、実際に家政婦を雇っているのはごく少数」（荒川氏）。13年のサービス開始の予定で、千葉市中央区の団地でチラシを配るなどして、潜在顧客の発掘を目指す。

（https://sites.google.com/site/jiazhumatchingn/）

コミュニティビジネス部門　コミュニティビジネス賞

自動車用廃電線などの品位の低い廃電線のリサイクル事業

三立機械工業
会長　**中根　昭氏**

三立機械工業は、廃電線を粉砕して銅を回収するリサイクル装置のパイオニア。昨年には自動車用ハーネスや家電コードなど、細く銅分が少ない電線用のリサイクル装置を開発した。細い廃電線は日本で処理しても利益が出ず、今までは大半が中国に売却されていた。しかし円高と放射能問題で中国の輸入が縮小し、国内での処理需要が高まっている。同社の装置はこうした電線を商業ベースでリサイクルでき、受注を積み上げている。

新ビジネスとして検討しているのは同装置を使った高齢者や身体障害者の雇用事業。千葉市内の工場や廃棄物処理業者から廃電線を集め、高齢者らが装置で処理し、有価物として販売する仕組みだ。関連業者とネットワークを作り、来年度の事業開始を目指す。「将来的には全国で同様のビジネスを展開したい」（中根昭会長）という。

（千葉市稲毛区山王町335、043・304・7511）